

## 令和7年度第2回高知県スポーツ振興県民会議 議事要旨

日時：令和7年11月6日（木）13:30～15:30

場所：サンライズホテル 向陽の間

出席：委員20名中12名が出席

出席委員：池委員、大坪委員、櫻井委員、須内委員、竹島委員、武市委員、寺村委員、野崎委員、丸委員、村田委員、矢野委員、柳委員

専門的知見を有する者：刈谷氏、北村氏、笹岡氏、山崎氏、橋谷氏、有安氏

議事：（1）第3期高知県スポーツ推進計画の取組状況及び令和8年度の取組強化の方向性について

（2）その他

- ・新県民体育館の整備等について
- ・令和6年スポーツツーリズムによる経済波及効果等について

### 1 開会

#### 知事挨拶

委員の皆様方には大変ご多用の中、本日は本会議第2回目のスポーツ振興県民会議に引き続きご参加をいただきまして感謝申し上げます。また、委員の皆様方には日頃から本県のスポーツ振興に関しましてひとかたならぬご厚情またご指導いただき、改めて御礼を申し上げます。

高知県では、スポーツにつきまして、スポーツの楽しさや感動を共有し、希望と活力ある社会を実現していこうということを大きな目標に掲げ、現在、3期目の高知県スポーツ推進計画を策定し、その実行に取り組んでいるところ。

10月1日付で、委員の皆様の任期更新があり、新しくご就任いただきました委員の皆様方には、改めまして御礼を申し上げますとともに、よろしくお願いを申し上げます。

スポーツ推進計画は大きな3つの柱の取組からなっている。

1つ目の柱は、「スポーツ参加の拡大」。

子どもたちの心身の健全な成長という意味でも、また、高齢者の方々を含めた県民の皆さんの健康づくりということを考え、スポーツの参加者の裾野の拡大を図っていくというのは、県のスポーツ行政の大事なひとつの政策目標である。

最近のトピックスで、1つは特に中山間地域の中学生などの部活動が、従前に比べ人口減少・指導者の高齢化ということがあり、存続が難しくなり、学校の先生の働き方改革ということの側面もあ

わせ、部活動の地域移行、地域展開、地域連携、こういったことを通じて子どもたちへのスポーツの参加の機会の提供ということを考えていかなければいけないというのがひとつの大きな政策テーマとして目指している。

また新しい分野について、子どもや若者の関心が高い新しいスポーツの推進をしていく。

委員の皆様方からもご指導もいただきながら、例えばダンスイベント、新しくアーバンスポーツの分野にも、県としても積極的に乗り出して投資をしていく。各種の施設整備、大会イベントの誘致等にも取り組んでいるというのが最近の新しい動きである。

2つ目の柱は、「競技力の向上」。

本日は池委員にもご出席いただいているが、昨年のオリンピックパラリンピックに、本県選手、本県出身の多くの選手が金メダルを含め、メダルを獲得され、県民の皆さんに感動と夢を与えていただいたということは記憶に新しいところ。

今年の国民スポーツ大会の総合順位については、残念ながら、後退したというようなことであるが、本県の競技力の向上は、このスポーツ推進計画の取組により、関係者の方々のご尽力により、着実に進んできている。こうした競技力の向上により、いわゆるトップクラスの選手をどんどん輩出していくと、県民の皆様の大きな励みにもなり、特に、子どもたちにとっては大きな夢と希望になると思っている。

こうした分野の後押しも、このスポーツ推進計画の中で、進めていきたい分野のひとつと考えている。

そして、3つ目の柱は、「スポーツを通じた活力ある県づくり」。

この点について、県ではスポーツツーリズム課という課を新たに設け、スポーツを通じた観光振興や、交流人口の増加を通じた地域の活性化への取組を進めているところ。

このスポーツツーリズムによる、昨年、令和6年の経済効果、経済波及効果の試算が49億円余りで、前年比13億円以上の増と、大きく数字を伸ばしている。

特に、今後、海外からの入込客数も増やしていくために、このスポーツの力を活用したい。

また、引き続きスポーツを通じて、高知県をさらに活性化していくために推進していく。

最近の明るいニュースとして、プロ野球の秋季キャンプにおいて、中日ドラゴンズに、今年度から新たにキャンプを開始していただいている。

また同じプロ野球で、阪神タイガースについて、本県出身の藤川監督や高知ファイティングドッグスで活躍された石井選手の活躍で、リーグ優勝を果たされたということで、球団にご縁のある高知県でもぜひ優勝パレードをと提案させていただいたところ実現することになり、今年10月の月曜日に、この阪神タイガース優勝記念パレードを市内で実施予定となった。

以上、スポーツ推進計画に関する3つの柱について説明した。

本日の県民会議では、特に今年度上半期の進捗状況・成果について、また、来年度に向けての取組の強化について、県の当局としての考え方をご説明をさせていただく。皆様方からご意見、

ご指導・ご鞭撻をいただきたい。

また、新しい県民体育館の整備について、現有地の建て替えという予定で、50年ぶりに新しい県民体育館を整備する計画づくりを具体的に進めているところ。

このことについての最近の状況も報告をさせていただき、委員の皆様方からのご意見などお聞かせをいただきたい。

本県のスポーツ振興施策がより実効性があるものにしていきたいと考えており、お集まりの委員の皆様方から、それぞれの立場からの忌憚のないご意見をお聞かせいただくことが是非とも必要だと考えている。

限られた時間になるものの、どうか本日のご審議をよろしくお願い申し上げまして、開会にあつての私からの挨拶とさせていただきます。

## 2 会長・副会長の選任について

### ○令和7年10月1日付け委嘱について説明

任期満了に伴い10月1日付けで新たに20名の委員で構成  
新委員の紹介

- ・パリ2024パラリンピック車いすラグビー競技日本代表 池委員
- ・大阪体育大学スポーツ科学部スポーツ科学科准教授 小林委員
- ・パリ2024オリンピックレスリング競技日本代表 櫻井委員
- ・公益財団法人高知県観光コンベンション協会国内誘致部長 野崎委員
- ・大阪成蹊大学経営学部スポーツマネジメント学科講師 丸委員
- ・高知県スポーツ科学センターセンター長 村田委員
- ・PERF株式会社代表取締役社長 柳委員

### ○会長及び副会長の選任

高知県スポーツ振興県民会議条例第6条1項の規定により、会長及び副会長は、委員の互選により定める。

出席委員から立候補、推薦がないため、事務局案を提案することについて意見を確認

出席委員全員から事務局案の提案について了承を得る

事務局案の提案

- ・会長 公益財団法人高知県スポーツ協会会長 青木委員
- ・副会長 社会福祉法人高知県社会福祉協議会会長 井上委員  
国立大学法人高知大学教育学部教授 矢野委員

出席委員から事務局案について賛同を得る

本日の会議においては、青木会長、井上副会長が欠席のため、矢野副会長が議長となる

### **矢野副会長挨拶**

今年の国民スポーツ大会では、昨年度 38 番であったが、総合順位は下回ったものの、飛び込み、弓道、ライフル射撃といった競技で本県の若手選手の 1 位獲得があった。そして、新たな競技種目、ビーチバレーボールやトランポリンやソフトテニスなどで入賞があり、大きな躍進が見られた。

また、全国障害者スポーツ大会においても、複数の競技で 4 つの金メダルを獲得した。

本県の競技力は着実に向上していると考えられる。

さらに、11 月 15 日から 16 日にかけて開催される「東京 2025 デフリンピック」には、高知県から 2 名の選手が代表として出場することが決まっている。この 2 人の活躍を期待をしたいところ。

現在、全国大会や国際大会において、高知県出身者の活躍が非常に増えており、これが県内の子どもたちの目標や県民がスポーツに触れるきっかけになり、さらには、高知県を盛り上げていくということにつながる。

本日は、今年度上半期の取組の進捗状況と来年度の取組の強化の方向性について、ご意見をいただくということになっている。高知県のさらなるスポーツ振興に向けて活発な議論をお願いしたい。

## **3 議事**

議事 (1) について、資料 1-1～1-4 を使用して説明。

議事 (2) について、資料 2、3 を使用して説明。

### **柱 1 スポーツ参加の拡大についての質疑**

#### **●刈谷委員**

スポーツ協会に加盟している団体は現在 61 団体。

県民の人口や競技人口が減っている中で、それぞれ競技の特性に合った育成・啓発を行っている。

スポーツ協会としては、4 月の下旬から 5 月のゴールデンウィークにかけ、小学生を対象にしたスポーツ少年団の総合交流大会を実施している。これは、中学校でいう県総体、高校でいうインターハイ予選の県総体になる。

小学生バージョンという形で総合交流大会という位置付けで実施しているが、参加については、スポーツ少年団に登録していないと参加できないというケースがある。その理由は、日本スポーツ協会が主催をしている全国大会の予選を兼ねているためである。

令和 6 年度は、スポーツ少年団の登録に、小学生は 3129 名の登録があったが、実際にその総

合交流大会に参加したのは2407名とかなり減っている。

スポーツ少年団には、一昔前は小学校4年生からということもあったが、全国的に小学生の数が減っており、小学校1年生から参加ができるという形になっているにも関わらず、参加人数が減少している。

そのため、昨年度から、高知県スポーツ協会として、総合交流大会に出場していない、登録していない小学生に対し、ドッジボールとか女子少年サッカーなど全部で8競技を11月、12月ぐらいに実施している。

これは、スポーツの楽しさや、汗をかく心地よさを知ってもらうために、登録しなくても誰でも参加可能という形を各競技団体にお願ひし、それぞれの交流大会でルールを決めながら大会を行ってもらっている。

こうした取組を行うにあたり、先ほど事務局からの説明でもあったとおり、保護者が現地まで連れていくことができないという課題が出てきており、解決を図りたいと考えている。

また、新県民体育館の取組で大きなアリーナができれば、そういったところを借りて運動ができればいいなと考えている。

#### ○矢野副会長

子どもたちのスポーツ参加、これはすごく大きな課題。

日本スポーツ協会では、当初、小学生を対象としたスポーツ少年団というものを立ち上げたが、今やその参加の範囲は、幼児、そして障害を持った方というようなところにまで拡大をしている。

本県にとっても、この子どものスポーツの拡大ということが大きな課題である。

#### ●須内委員

運動が好きな子どもの割合ということがあるが、私たち学校サイドで県のスポーツの振興ということ考えたときに、授業レベルで事業展開ができないといけないと考える。

本校の例でいくと、私の勤務している学校の例になるが、体力調査を本校では年2回実施をしている。春に行ったその結果を基に、年間を通じて、子どもたちが自分たちの何が不足しているのかを捉えて、そのために自分たちがどういうふうに日常で運動をしていくのかを図りながら、年度末にもう一度同じテストを行う。

全体的に、自分たちのウィークポイントに向かって運動をしていくことを決めながらやるため、ほぼほぼ成績が落ちることはなく、どちらかというと向上していくような、そういうふうなことも取組として行っている。

成功体験であったり、達成感、そういったものは、運動が好きになることに繋がると考えている。他の学校でも同じような取組をされているかと思うが、大事だと思う。

それから授業の中で、体を動かしたり、運動したりすることが、どれだけ健康に繋がっているか、社会に出て役立つとか、学校での学びが一生を貫いて生きていくといったことを子どもたちにも実感してもらいたく、そのような視点で学校で取組をしているところ。

また、大変ありがたいことに、部活動について、地域での移行であったり、展開のところを考えたときに、部活動の支援員であったり、外部コーチについて、国や県から補助金で、フォローいただいていることはすごくありがたく思っている。

自分の学校の状況を説明することになるが、地域クラブについて、越知町にはバスケットボールが1つあるが、地域の方に学校の子どもたちを助けていただいている。子どもが助かるのはもちろんのこと、教員の業務改善にも繋がっているという側面もある。

それから、本校にはテニス部はないが、保護者の方の協力のもと、土佐清水市の硬式テニスのクラブに通って活動している生徒もいる。

保護者の方の協力とかご理解がなければいけないとは考えるが、地域クラブが4年を追う毎に伸びているということは、子どもたちの運動機会の広がりにもすごく繋がっていると思う。

しかし、制度やスタッフがいるところはいいが、全県的に見て、まだまだその地域によっては、指導者がいないとか、十分に育っていないところもあるため、そうしたことは課題と考えている。

#### ●寺村委員

子どものスポーツの環境づくりについて、地域格差が高知県の中にはすごくあるのではないかと考える。

中山間地域の子どもは、学校が統廃合すればするほど、スクールバスで通うこととなり、日常生活の中で基本的な体力を養う機会も少なくなる。市内でも送迎をしている家庭も非常に多い。子どもの生活を見ていると本当に運動する機会、日常で外へ出たり運動する機会自体が、昔に比べ少なくなっている印象がある。

また、不登校の子どもについても運動する機会がすごく少ないので、注目をしていけないといけないと考えている。

保護者の送迎の負担について、非常に大きくて、私にも子どもがスポーツをしている時期があり、その負担を実感した。何かの競技スポーツをするとなったときには、学校の部活動が終わってから、さらに、スポーツを専門的に行うところに連れていって、保護者も一緒に見守るということを、週に何日も続けていた時期があった。

スポーツをさせることについての保護者の負担は大きいというイメージがあり、スポーツをさせられる家庭は限られるという印象がある。

その送迎負担の低減や短時間にする工夫について、子連れが構わないとか、託児つきプログラムがあるとか、そういった保護者が参加しやすい雰囲気づくりが必要である。

最近、福島や香川で子育て世代に、業種を伸ばす業態があり、それが家事支援代行。地域への移行をするにあたり、保護者の負担を減らすために家事を代行するという、汚れた洗濯物を洗いますといった家事代行支援というものが結構業績を伸ばしてるそうである。

現在、子どもの保育とか制度が充実すればするほど、保護者が働くことに、どうしてもシフトしていくような社会になっているため、保護者が何かをできるという環境がだんだん作りにくくなっていく面もあるのではないかと考えている。保護者が参加しやすい環境づくりがとても必要と考える。

あと、地域移行や地域連携の中でも、やはり指導者の質をどのように確保するかも、特に専門的なスポーツについては課題と考える。

その地域の中で経験のある保護者ということだけではなく、子どもの発達とか、指導方法について、十分に理解をした指導者の確保が必要と考える。

地域の中で世代間交流も含めて、子どもが安心して運動できる環境を整える、また、保護者の負担を減らすことが、これからの地域づくりのスポーツの中ではすごく大事な視点と考える。

#### ○矢野副会長

私が所属しているアカデミアの中でも、女性の研究者を何とか増やそうと、活躍を推進しようということではいろいろな学会があるが、大体託児所が入っている。

一方的に頑張れということではなく、助ける環境を整備をしながら、女性の指導者の拡大ということも求められているところなので、そのような環境の整備ということも必要なかなということ強く感じている。

#### ●池委員

私も普段障害者スポーツセンターでトレーニングしていて、よく学校訪問とかもするが、よく見るのが放課後デイサービスに来られている子どもたちが、障害者スポーツセンターのバスケット用の車椅子に乗ってバスケットしたり、私たちが使っているラグビー用競技車でガンガンぶつかっている様子。

本当にただただボールを持って遊んでいる子、ラケットを持ってやっつてる子、それぞれが自由にスポーツを楽しんでいる姿を見ていて、ニーズに合わせたものがその場所にあって、そこに数多くの職員さんが、障害者スポーツセンターではなくそのデイサービスの職員さんが見守る中で、そうした活動をされていて、すごくいい光景だなというふうに思っている。

例えば、不登校の子について、その子の感情を尊重しながらスポーツに向き合うことができるとか、夏休み、冬休みや春休みとか長期休みを使って、普段学校に通っている生徒との交流とかで、何かこう一歩を踏み出すきっかけになる場合もあるかもしれない。学生が子どもたちへのスポーツ指導で関わりたいという意見が7割程度あると事務局から先ほどあったが、そういう中で、専門家の方と、また学生と、男性・女性、年齢も幅のある人たちが見守る中で、その子たちを尊重してスポーツを行う環境というのは、救いの手もたくさんあり、見守る目もあり、そして、繋がりを生む。また、いろいろな人をその場で見るという機会や、いろいろなスポーツに触れられる機会が、非常に重要と考える。

幼児について、小学校に通う前であれば、幼児の段階でいろいろなスポーツ、自分の好きを見つけていくこともできるので、ある程度学年を揃えながらやる方がいいかもしれないが、子どもも赤ちゃんもいる環境をスポーツの現場で作り上げることで、いろいろなことに対してプラスの相乗効果が生まれてくるのではないかと、私がスポーツをしている関係の中で、私の環境と重ねたときにそういうふうに考えた。

### ●丸委員

私自身が専門家である一方で、小学3年生の男の子の母親でもあり、そうした観点から、地域のコミュニティを巻き込んでスポーツができる場を作ることの重要性を、非常に身にしみて感じている。

ちょうど今日私の子どもの校区に、熊が出たと学校からのメールが届いたばかりで、急遽警察の方が見回りをしてくださっている。先ほどから出ている、スポーツや学校も含む送迎の問題は、親としては非常に重要である。両親が共働きで頼れる人がいないと、子どもの送迎ができず、スポーツの機会を与えたくても与えられない親というのは一定数現れてきている。

また、自分が子どもの頃のような時代と違って、現代はボールを使える場所や公園もどんどん少なくなっていて、スポーツマネジメントのアカデミアの世界で今非常に問題視している。こうした問題に対して、部活動の地域移行と同じくらい問題意識を持って取り組んでいる方も研究所もあり、必要な議論をより活発に進めていただきたい。

スポーツができる場や環境について、柔軟な姿勢で、室内でもできる、今のような厳しい気候でもできる、簡単にできる、勝敗にこだわらずできる、競技能力や身体機能に関わらずみんなできるといった多様性や環境の整備についての議論を県民会議の場でも進めていただきたいと感じている。

### ●武市委員

総合型地域スポーツクラブは、基本市町村で1クラブ作ろうということで、現在26クラブほどある。部活動の地域展開について、単なる部活を地域に移すだけではなくて、地域で、みんなでいろいろ業種の方々の意見をとり合わせて、持続継続できるスポーツの関係を作っていかうというものではないかと私は考えています。

市町村を跨いで、連携して何かできる仕組みについて、県からのアドバイスやコーディネーターについての予算化をもう少ししていただきたい。

私は、南国市で活動している。子どもたちが、放課後に、学童クラブなどの場で、スポーツだけに限らず、自主的、主体的に物事に取り組むことができる環境整備を、私たち大人が携わっていく必要があるのではと考えている。

これから部活動の地域移行を進めていく場合、運営報酬などの処理、お金の問題とか、そういうことへの取組も今後必要になるのではないかと考える。

### ○矢野副会長

地域がゾーンとして連携を図るという、このゾーニングの考えが、現在国際的にもすごく用いられている。例えば、ドイツでは、交流がしやすいという理由で、州を超えてチームを組んだりということを認めようという方向で進んだりしている。子どもたちの活動が主体ということに目を向けながら、大人が議論を進めるべきではないかというような提案をしているところがある。

高知県の中でも、どのようにして地域連携を進めていくか、スポーツ参加が拡大されていくかということを考える必要があるというふうに考える。

## 柱2：競技力の向上についての質疑

### ●村田委員

高知県スポーツ科学センター、7年目になり、多くの競技団体に活用していただき、それぞれの競技団体の強化につなげていただいていると思う。

第3期の計画のKPIについて、スポーツ医科学を効果的に活用する競技団体数30という目標があるが、現状は一昨年、昨年度から20を少し超える競技団体数で推移しているという状況。

この要因として、資料1-3の(2)スポーツ医科学の活用の見えてきた課題としてマンパワー不足と書かれているが、それも一因と思われる。

現状としては、昨年度、今年度、多くの競技団体の方が使用し、スポーツ活動に活用していただいております。今年度も昨年度同様の数の競技団体の利用になっているところで、現状の体制のままでは増やすことが厳しいという状況が続いている。

また、競技団体に限らず、一般の方の利用がここ数年ですごく伸びていて、多くの一般の方にも周知ができているためとは思っているが、その数が増えるということは、競技団体数を増やすために人員を割けないということとなる。

令和8年度の方向性というところで、拡充となっていますので、こちらについてはぜひ進めていただきたい。より多くの競技団体にスポーツ科学センターが入っていけるようなことができればと考えている。

また、具体的な年間計画案を、スポーツ科学センターから提示した上で指導やサポートを実施、ということもまた新たな方向性として掲げられているが、こちらについては、スポーツ医科学の活用だけの計画では競技団体の強化には効果的に繋がらないため、実際の競技団体の強化計画、作成する段階にも入り込んでいけるようなことができれば、より効果的になると考える。

県スポーツ協会のほうで強化の計画をまとめられているので、県スポーツ協会とも協力することによって、よりスポーツ医科学の活用が進むと考えている。

### ●大坪委員

高知県外では、商業施設の屋内に芝生が敷かれ、乳幼児や小学生が保護者と一緒に遊んだり走り回ったりできる環境が整っている。走るだけのシンプルな遊びであっても、子どもたちは非常に楽しそうに過ごしており、淡路島にも同様の施設があつて、見知らぬ親子同士の間で自然なコミュニケーションが生まれていた。

一方で高知県では、夏場の厳しい暑さや雨天時には屋外で小さな子どもが遊ぶことが難しく、商業施設に出かけてゲームセンターなどでお金を払って遊ぶケースが多く見られる。

ぜひ、高知県内にも親子が気軽に利用できる屋内遊び場の整備をご検討いただきたい。併せて、その近くに飲食ができるスペースがあると、より利用しやすい環境になると思われる。

また、高知県の競技力向上において「くろしおキッズ」の存在は非常に大きいと感じている。

しかし、委託業者の決定時期が3月末であるため、4月以降に施設予約を行おうとすると、1～2月頃に競技団体などの予約が先に入り、希望する場所が確保できないという問題が生じている。県として、一定の日時や場所をあらかじめ確保する仕組みを設けることや、委託業者の決定時期の見直し、随時契約の導入などをご検討いただきたい。

●山崎氏

市町村のスポーツ振興について、競技力の向上ではないが、裾野を増やすことが市町村の役割と考える。

何が課題かというと、指導者の不足と、運営費の保護者負担。

令和8年度に向けて、新たな制度も検討いただいているということで、活用しやすい制度を構築していただきたい。

●笹岡氏

高知県内に町村が23あり、柱1の関わりかもしれないが、どんどん学校が統廃合している。

自宅から学校まで通うのも、遠距離になるお子さんがどんどん出てくる。なおかつ、統廃合したら、別の学校でスポーツの練習をするという場合に、寺村委員が言われたように、送迎を誰がするのか、どういう方法でするのか非常に問題になってくる。保護者の方が手助けするという考え方もあるし、学校自体が行うということもあるかもしれない。

事務局の考え方を聞きたいが、クラブ活動の経費について、従来よりも余分にかかる経費に今後対応していくのかというところがまず1点。

それから、広域で連携した取組のエリアは、郡単位なのか、それとも交通の利便性を考えた時間的なエリアでの地域なのか。

それと、クラブ活動に興味がない生徒が40%超と説明にあったが、そういった子どもたちへのアプローチをどういうふうに考えているのか。

○事務局（スポーツ課）

部活動の地域展開に関しては、今国の方の支援策が概算要求で出ており、まだ固まっておらず、今後詳細が出てくるようになっているため、それを受けてになるが、今のところ、県、市町村、国、この3つで、今までかかっていた費用分については、一定保護者の負担も求めていくという形が示されている。

送迎のことについては、昨年、県教委の保健体育課で、部活動の拠点校をやるにあたり実証事業をしている。その中で、この移動に関する補助のようなこともやっており、例えばタクシーでできるのか、あるいはスクールバスでやるのか、そのような検証も実際に行ったと聞いている。

毎日は無理としても、例えば土日、週末とか、何かできないかというのは、これから市町村とも考えていきながら、あるいは、広域でバスを動かしてできないかとかというようなこともそれぞれの市町村で検討いただき、それに県も関わっていきながらどういった支援ができるのか、そういったことを考え

ていかなければならない。

広域の取組のエリアについては、幡多とか高幡とか、現在行政のほうで考えているところ。

#### ○矢野副会長

土佐清水市が1つのモデルとして、地域の中で、どのように部活動を地域移行するか実証的に取り組んでいる。

例えばスポーツをしなくても、町の中を高齢者が買い物をしたりするときに便利のように、巡回のバスを走らせ、それが最終的には体育館まで行く。子どもたちは活動が終わったらその巡回バスを待って地域まで戻ってくる。高齢者の人たちもスポーツをして買い物をして帰るみたいな地域づくりを、今後構想していく必要があるのではないか。

日本だけではなく、海外も同じような状況であるが、難しいのは、日本が全世界の中の一番先駆けで高齢化が進んでいるため、先行研究がないところである。

そういう意味では、高知県の取組は、世界的な注目に値するのかもしれない。是非こういう機会に、みんなで専門知識を出して、そして様々な声を集約して、進めていければよいのではないか。

#### ●櫻井委員

高知県の強化の課題は地域格差があることだと考える。

自分自身も大学で、関東のほうを見て、いろいろな大学に練習に行けるとか、高校生と練習できるとか環境があるが、高知県はそれも難しく、さらに、高知県の中でも、地域格差があるので、その中から、トップを目指すのはなかなか難しいことと思う。

あと、指導者の負担が大きいと感じる。

なかなか女性で指導されている方や、教員をしながら指導される方など、負担がかかり過ぎてしまっている部分がある。それだと長くは続かず終わってしまうこともあるため、いつまでも続けられるよう、1人の方に負担がかかり過ぎないように、県外に大学生で出たとしても高知県に帰ってきてもらい指導者を増やす工夫が必要。

特にマイナースポーツだと専門的な技術がないと教えることは難しい。

#### ●竹島委員

スポーツは、今日やってすぐ上手くなるわけではないため、やはりこつこつと5年、10年と、現在トレーニング方法も確立されているため、さらに15年と、30才を過ぎてもトップに近づいていければいいと考えている。

現在、2002年の高知国体で選手だった人たちが、指導者になり、10年経ち形になり、20年経ち軌道に乗ってきている種目で、レスリング、カヌーや飛び込みが成功例だと思う。また、櫻井委員のような次世代を担う指導者も育ちつつあると思う。

競技力の向上について、スポーツ参加の拡大が基本だと考える。

ジュニアは、やりたいスポーツができる環境づくり、中学校・高校は、部活動の地域移行による指

導者の確保、大学・一般は、競技力向上の原点である指導者の育成がそれぞれ重要で、それらを繋ぐマッチングが重要。

高知県で頑張っている選手には、まずは国スポに力を入れてもらいたいと考えている。各競技団体の方々にも選手に伝えてもらいたいと思う。

参考資料2の4ページの流れのとおりになっていけば、いろんな面で競技力の向上に繋がっていくんじゃないかと思う。

大学生の中でも指導者に興味がある大学生もたくさんいるということで、高知工科大学はなかなか余裕もないと思うが、高知大学はサッカー部等人数も多いため、県が柔軟に指導者の補強に取り組んでほしい。

#### ○事務局（スポーツ課）

指導者については、可能な限り、人材の発掘や育成も含め、また大学としっかり連携をさせていただきながら取り組んでいきたい。またぜひお力もお貸し願いたい。

#### ●北村委員

スポーツ科学センターの障害のある方への活用の促進が少ない。我々としても活用に取り組みたい。一緒に協議するような場を持ち、安定した形で障害のある方が使えるような環境を整えていただけると非常にありがたい。

デフリンピックに出場する2名の選手のうちの中西選手は、県の強化費を大学時代からもらっていて、それが非常に彼にとって大きかった。他県の協会と比べて、非常に柔軟な活用ができるということで本人も感謝をしており、こうした取組の継続をお願いをしたい。

また、中西選手が三段跳びで代表になったが、彼の指導をしてくれているのは高知農業の小松隆志先生で、いわゆる競技団体との繋がりの中から、トップアスリートが出てきたりもしているので、その辺の充実にも今後取組が必要と考える。

資料1-2に、インクルーシブという言葉が複数回出てきているが、部活動の地域移行の中で、障害のある方たちが本当に取り残されていないのかどうか、学校で課題のある子どもたちが、学校外の環境でさらにスポーツを行うという中で取り残しになっていないか非常に心配している。

一般のクラブ、学校の部活動自体にも馴染めなくて、障害者スポーツセンターに来て、同じ競技をやるという子どももいるが、スポーツは上手い・下手、早い・遅いといったものが明確に出るため、第三者の目があると笑われるのではないかと怖れ、スポーツをしないという子どもも実際にいる。

インクルーシブという言葉はすごく大事で、我々も賛成ではあるが、そこの中身について丁寧に進めていく必要があると考えている。

### 柱3：スポーツを通じた活力ある県づくりについての質疑

#### ●有安氏

現在、若者のスポーツに向けての関心が薄くなっている印象があるが、バレーボールやバスケットボールに関しては、一定興味を持っての方が多印象がある。

ただ、こうした誘致の機会があったとして、情報をどう提供するか、例えば私どもの新聞にも残念ながら以前ほど若者向けの訴求力はなく、課題と考える。

以前観戦した試合について、地元の小中高生の招待の取組もあったかもしれないが、2階席の空席が多く勿体ないと感じた。

スポーツを好きになるきっかけとして、ライブで観戦することは大きいのではないかなと思う。

自分自身が部活動や地域のクラブに入って活動するのが一番大きいですが、その他のきっかけとしては、プロスポーツを見て感動することが大きな材料と思う。こうしたきっかけづくりに、今後さらに力を入れていく方法があればと感じる。

自転車競技は現在盛んに行われているが、例えば宿毛方面までルートをつなげて、4県周遊とはいかないまでも、部分的にでも、県外の観光資源やスポーツ資源と連携しながら取組を進める。自転車については特に県西部で何か取組が進めばと思う。大きい大会の開催にも自転車はいい材料かと思う。

また、「スポる！KOCHI」について、動画コンテンツなど内容が充実しており、これがうまく広がり、県内、県外、国外まで周知していくことができれば、非常に大きな材料になると思う。

周知に向けては、SNSのほか、旧来のマスメディアも協力させていただける部分もあるのではないかと。今後この取組の展開が広がっていけばと思う。

#### ●橋谷氏

スポーツツーリズムについて、現在、四国の中央銀行4行でアライアンスを組んでいる。

その中でも、観光やスポーツツーリズムの関係も議題に上がり、各セッションで話し合っているところ。

特に最近はスポーツイベントとかも議題に入っているようで、今後、何かお知らせできることもあると思う。

スポーツ振興については、予算の執行、ここが重要と考える。

限られた予算の中で最大限の効果を発揮するいうところで、KPIなどの数値目標は必ずあるが、低学年のスポーツ参加を広げるにはエンゲージメントの方が大事じゃないのかと考える。

ささいなきっかけで広がっていくもので、都会では、幼稚園・小学校の運動会、周りの大学や地域の運動会と、年4回ぐらいそういう形の運動会が身近であり、小さい子どもがスポーツに興味を持つ機会が多い。また、近隣の大学生が練習前に地域の子どもを集めて指導してくれるイベントなどもある。高知県はそうしたきっかけを作るイベントなどの機会が足りていないのではないかと。と思う。

#### ●野崎委員

旅で感じたことが本当に一生残るもので、旅先での出来事はとても大事なことだと思う。

現在、行政にも導入が進んでいるラーケーションというものがある。

保護者の休日に合わせて、お子さんが学校を休んで校外学習をするということが、休日扱いにならず、旅の中で学習をするという取組を進めている自治体もある。

プロスポーツ・アマチュアスポーツの合宿やキャンプ等、そういったものを見せてあげられる場の提供やコンテンツを作ることで、誘客につなげていくということもできるのではないかなと思う。

ラーケーションという制度とかけ合わせて体制を整え、観光ツーリズムと一緒に伸ばせていけたらいいと考える。

また、「スポる！KOCHI」の情報に関して、旅の前にいろんな情報を得ても、実際現地に来ると今何をやっているんだろうとわからなかったりすることも多いので、旅の中で選べる情報をもう少し充実させて、滞在されている方に向けての、今見れるスポーツイベントであるとか、まさに今できるスポーツ体験をリアルタイムで届けられるような、個別の出し方ももう少しあってもいいと思う。

#### ●柳委員

高知県とも様々なダンスの授業をさせていただいているが、そのダンスを利用して、解決できる領域があると思う。

ひとつが「スポーツの普及」で、子どものスポーツ参加機会の確保であったり、体力向上、あと女性の運動習慣不足みたいなところに向けて、比較的女性に人気のスポーツでもあるため、そうした観点での課題解決につなげられるのではないかな。また、ダンス指導者の不足や、義務教育でのダンス必修化で専門的な知識とか経験が不足している。この2つの問題点に対しての施策で、学校訪問型のダンス体験プログラムや指導者向けの講習会などにも取り組んでいる。

スポーツの普及において、大きく貢献が期待できる人材が地域おこし協力隊かと思う。実際には、我々は都心のスポーツ団体であるため、なかなか数多く高知に行ったりできないためオンラインでレッスンを行うこととなるが、オンラインレッスンでは、現場とオンライン先をつなぐ潤滑になる協力者が必要で、そこに地域おこし協力隊の皆さんの協力があって実現しているというところもある。

今後もこうした協力者、地域おこし協力隊の安定した確保が課題になると考える。

そして、もうひとつが「まちのにぎわい向上」である。

地域コミュニティの一体感の醸成やにぎわいをどう作っていくかということになるが、ダンスはどのようなイベントとも相性が良く、例えばバスケの試合のハーフタイムショーであるとか、様々なスポーツと相性が良いと印象を持っている。

また他にも、青少年とダンス作品を一緒に作って披露するというような活動もしており、地域を巻き込みひとつのイベントを作ることも、ダンスは実現しやすいものだと思う。同時に何百人が一緒に踊れたりとか、そういった団体が多く参加することも可能なので、比較的人を集客するイベントとなる傾向がある。出場する1人のダンサーに対して、平均して4から5人のお客さんを連れ込むというような話もあり、イベントを成立させやすいという面もある。

本日説明いただいたアリーナ構想にもこのダンスは活用できるのではないかと考えているところ。  
現在の課題に対する施策について、今後とも高知県と協力して取り組んでいきたい。

#### 4 閉会

以上

署名 矢野 宏光